

1941年のクロアチアにおける抵抗運動の発生について

材木 和雄

広島大学大学院総合科学研究科

The Emergence of the Resistance Movement Engaged in the Fight against the Occupation Forces in Croatia during the World War II

Kazuo ZAIKI

Studies of Civilization and Society,
Graduate School of Integrated Arts and Sciences

Abstract

It is well-known that there were two types of resistance forces in occupied Yugoslavia during the World War II. That is, the Partisans and the Chetniks.

The Partisans were the military forces directed by the Communist Party of Yugoslavia. The Chetniks were the paramilitary forces founded by a group of officer of Yugoslav Royal Army, who did not want to surrender to axis forces. The Partisans were a united front where all nations of this country joined hands, whereas the Chetniks were consisted of almost exclusively the Serbs.

In the postwar period, for a long time, the Partisans and the Chetniks were considered as completely different and opposing forces. However, with the collapse of the Communist regime, these differences came to be considered relative ones and new views have emerged.

For example, recently in Croatia, some historians say that the Chetniks were the forces which, from the very beginning of the rebellion, joined with the Communists, in the battle against the occupation forces. They insist that they cannot find any difference between the Chetniks-led guerrillas and the Communists-led guerrillas, especially in the barbarous acts they made against the Croats and Muslims inhabitants.

This paper tries to analyze the process of the resistance movement occurred in Croatia during the World War II, and to reexamine the attributes of the guerrilla units on the front that were mainly composed of Serbian peasants.

Its tentative conclusion was that contrary to both the common belief and the new view, both the Chetniks and the Partisans did not exist as distinct entity during the earliest period of the rebellion. Namely, in this period, two opposing units were undifferentiated on the whole, so that we cannot refer to the Chetniks unit (neither the Partisans) in the proper sense of the word. What we can point out as an attribute of guerrilla units at this time is “proto-Chetniks”. In this sense, we agree to the view of Croatian historians which regards the Chetniks-lead guerrillas and the Communists-lead guerrillas as homogeneous groups in relation to the brutality they conducted against the Croats.

The author further insists the guerrilla units as “proto-Chetniks” began to be differentiated into two opposing groups, namely the Partisans and the Chetniks, forced to answer two questions raised by two opposing leaders. One was whether they would fight the battle against Italians. Another was whether they could accept anti-Ustashes’ Croats as blood brothers, distinguishing Ustashes and the non-Ustashes’ Croats.

As a whole the Communists got an edge on this competition. The Serbian peasants followed by and large the instructions of the Communists. However, they were the persons who were susceptible to current conditions. They could cross the aside, depending on situations, especially on war conditions and the Chetniks’ propaganda or tricks. So that the differentiation was not still completed in earlier stage of the competition.

1 はじめに

第二次世界大戦中に枢軸国によって占領されたユーゴスラヴィアには、二つの種類の抵抗勢力が存在した。パルチザンとチェトニクがそれである。

パルチザンは共産党が率いた軍事組織であり、最高司令官は中央委員会書記長のヨシブ・ブローズ・チトーであった。チェトニクはドイツ軍への投降を拒否した旧王国軍将校のドラジャ・ミハイロヴィッチ大佐を最高指導者として仰いだ武装勢力であった。ロンドンに亡命中の王国政府はこれを国内の正規軍として承認した。チェトニクは「祖国におけるユーゴスラヴィア軍」を名乗った。パルチザンは人民主義的でこの国の全民族が参加した共闘組織であったが、チェトニクは王党派ではほぼセルビア系住民に限定された集団であった¹。

共産党とチェトニクの指導者は共にユーゴスラヴィアの再建を目標としていたが、それぞれがめざす戦後の政治体制と国家像は根本的に異なっていた。共産党は共和制と連邦制の原則の下に社会主義の国家を建設しようとしたが、チェトニクは戦前の政治体制とセルビア中心の単一国家の復活を目標としていたからである。チェトニクはパルチザンを敵視し、占領勢力と協調してこれを攻撃した。だが、戦争に勝利したのはパルチザンであり、この国の権力を握ったのは共産党であった。戦後の新政権は捕捉したミハイロヴィッチを裁判にかけ、占領勢力との関係を明らかにした上で死刑に処した。

このような経緯から、社会主義の時代にはパルチザンとチェトニクの相違を強調する議論が支

配的であった。この時代にはチェトニクといえれば偏狭な大セルビア主義者が結集した反動勢力であり、占領勢力と内通して祖国と人民に損害を与えた対敵協力者の代名詞であった。これに対し、パルチザンは友愛と団結の精神によって諸民族が手を結んだ進歩勢力であり、祖国の解放のために勇敢に敵と戦った人民解放運動の唯一の担い手だと考えられた。

チェトニクを悪玉とし、パルチザンを善玉とする見方は、共産党が成就した社会革命を正当化する戦後の支配的イデオロギーと不可分に結びついている。だが、それが故にこそ、共産主義者の支配が崩壊すると、このような見方は必然的に大きな見直しの対象となった。

この国の東の中心地域であったセルビアでは、1990年代以降、チェトニクとパルチザンの関係については、その相違性ではなく、枢軸国によって解体されたこの国の再建をめざした運動という点での共通性に眼が向けられた。その上で、共産主義者の勢力拡大を阻止し、旧王国の再建をめざしたことがむしろ肯定的に評価され、チェトニクはセルビア人愛国者の民族運動だと考えられるようになった。ミハイロヴィッチを裏切り者扱いする見解は否定され、彼の名誉は回復した。これに対して、チトーはセルビア民族の利益を一貫して抑圧した独裁者と見なされ、かつての賞賛と崇拜の念はすっかり失われた。

セルビアではチェトニクの運動を評価する傾向は21世紀になっても変わらない。むしろその気運は高まっている。たとえば、パルチザン部隊と異なり、チェトニク部隊の退役者にはこれまで軍人

年金が支給されなかった。だが、2004年12月、セルビア議会は、チェトニクの運動に参加していた者に、パルチザンのメンバーと同等の権利を与える法律を、圧倒的多数の賛成（賛成250、反対24）により採択した。これによって、パルチザンに転向せず、ミハイロヴィッチが指揮する部隊に最後まで留まった者にも軍人年金が与えられることになった。注目されるのは、この法律がパルチザンと敵対したかどうかに関係なく、人民解放戦争に参加した者はすべて等しい権利を持つとしたことである²。

これに対し、西の中心地域であったクロアチアでは、チェトニクの運動は肯定的な見直しの対象とはなりえない。クロアチア人の記憶の中では、チェトニクは戦時中にセルビア人ショーヴィニストに導かれてクロアチア人を敵視し、これに蛮行を為した集団であるからである。クロアチアで近年進められているのは、共産党が指導した抵抗運動の性格を見直し、その関連でチェトニクの実像を明らかにする作業である。それは、これまで抑制的にしか語られてこなかった抵抗運動のネガティブな側面をもっと明確にしようとする作業でもある。

ユーゴスラヴィアの西部地域、すなわち、当時のクロアチア独立国の領土での抵抗運動は、共産主義者がセルビア人住民を蜂起集団に組織し、ウスタシャ政権に対する反乱を起こさせることによって開始された。その際、社会主義時代の通説によれば、この反乱の開始後にイタリアおよびセルビア人ブルジョアジーの利益を代表する武装集団チェトニクが出現した。チェトニクはウスタシャ政権の武装勢力への攻撃という点で当初は共産主義者と共闘していたが、まもなく反乱勢力の指導権をめぐる激しい抗争を繰り広げることになったとされる。

ところが、近年のクロアチアの研究者は、チェトニクは最初から蜂起集団に加わり、共産主義者と共に反乱を指揮していた勢力だったと主張する。たとえば、第二次世界大戦中のクロアチア史を専門とするズドラフコ・ディズダル（クロアチア歴史研究所）は、このことは資料を一瞥しただけでも明白であり、後のチェトニク部隊における

指揮官の名前の大半は蜂起部隊の統率者群の中に見出すことができると述べる。さらに重要な論点は、クロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける反乱では、蜂起部隊は武装勢力と民間人とを区別することなくクロアチア人およびムスリム人に襲いかかり、蛮行を加えたこと、そしてこの点ではチェトニクを指揮官とする部隊と共産主義者を指揮官とする部隊との間には差異を見出せないとされることである³。

このことを端的に示す事例とされるのは、反乱が開始された1941年7月27日から数日間の間にクロアチアとの境界に近い西ボスニアのカトリック教徒の多い町で蜂起部隊がクロアチア人およびムスリム人の住民に対し見境なしに為したテロ攻撃である。ボサンスコ・グラホヴォでは、五つのクロアチア人の村が次々と略奪に遭い、すべての家屋に火が放たれた。数日間の間に62人のクロアチア人が殺害され、このうち5人は女性で9人が子どもであった。同じ7月27日、蜂起部隊の別の一団はドゥルヴァール近郊で走行中の汽車を襲撃し、200人を超えるクロアチア人を惨殺した。殺された人びとは北ダルマチアのカトリックの聖地での宗教行事に出かけ、その帰途にあった巡礼者であった。ドゥルヴァールの中心部には約800人のクロアチア人が住んでいたが、反乱勢力が町を制圧した後、約300人のクロアチア人が相当数のムスリム人と共に殺害された。その大半は非武装の民間人であった⁴。

ディズダルによれば、蜂起部隊の実体は「チェトニクの紋章の入ったベレー帽をかぶったチェトニクの成員と赤い五角星の紋章の入った帽子をかぶったゲリラおよび共産主義者」の混成集団であり、彼らは一体となってクロアチア人およびムスリム人に蛮行を為したと見なされる。もしそうだとすれば、この犯罪的行為に対する責任はチェトニクにあるだけでなく、共産主義者とその配下のゲリラ部隊、すなわち、パルチザンの側にもあるということになる。その後チェトニクは共産主義者に反旗を翻し、チェトニクとパルチザンの抗争が始まる。だが、ディズダルの説を踏まえると、蜂起の開始時点に遡れば両者は同質の蜂起集団であり、チェトニクとパルチザンはいわば同根異花

だということになる。

評価の仕方が180度違うとはいえ、近年セルビアとクロアチアで共にチェトニクとパルチザンの相違が相対化され、その同質性が強調されていることは興味深い現象である。だが、このような見方はこれまでの常識とは大きく異なるものであるだけに、チェトニクとは何であったのか、パルチザンとは何であったのか、そして、そもそもユーゴスラヴィアにおける抵抗運動とは何であったのかを改めて問い直すことを求めているように思われる。少なくともこの国の成り立ちに関心を寄せる者はその必要性を強く感じる。それは、私見によれば、ユーゴスラヴィアとは何であったのかに深く関わる極めて重要な問題群だからである。

本稿はこのような問題を念頭に、第二次世界大戦中のクロアチアにおける占領勢力に対する抵抗運動の発生過程をたどり、運動の実戦部隊となった蜂起集団の性質を再検討しようとする試みである。それは上述の諸問題の解明に接近する手がかりを得ることを目的としている。その結果、導き出される仮説は、厳密な意味で考えると、チェトニクもパルチザンも当初は実体として存在せず、両者は抵抗運動の展開の過程での相互作用の結果として本来的な姿を明確にするようになったのではないかということである。

2 クロアチア独立国の形成直後にセルビア人が置かれた状況

1941年4月、ユーゴスラヴィア王国を崩壊させた後、ドイツは、クロアチア人に独立国家の建国を認め、「クロアチア独立国」を誕生させた。これは、ユーゴスラヴィア王国に対する反感とそこからの独立志向を強く抱いていたクロアチア人の歓心を買ひ、枢軸国の占領政策を彼らに受け入れさせることを狙った措置であった。

クロアチアの独立はヒトラーが開戦前に指示していた占領計画に沿った処置であったが、当初の計算どおりに進まなかったことが一つあった。それは、クロアチア人の支持が高かったクロアチア農民党党首のマチェックの取り込みに失敗したことである。そのため、ドイツは次善の策として、

極右団体のウスタシャの協力を得ることにし、4月10日のザグレブ進駐と同時にその指導者の一人であるクヴァルテルニクにクロアチアの独立宣言をさせた。このあと最高指導者のアンテ・パヴェリッチとウスタシャの幹部は亡命先のイタリアから急遽帰国し、政権の座に就いた。

クロアチア農民党ではなくウスタシャが新国家の政権を担ったことは、その後の事態の展開にとって決定的に大きな意味をもったと考えられる。なぜなら、ウスタシャは単にクロアチアの分離独立を求めた民族主義者であっただけでなく、セルビアとセルビア人を敵視するテロリストの集団でもあったからである。これに対して、クロアチア農民党は平和主義のブルジョア政党であった。彼らは過去15年間に渡りクロアチアにおけるセルビア人の支持政党である独立民主党と政党連合（「農民・民主連合」）を結成し、クロアチアの自治権を求めて共闘をおこなうと共に、開戦前にはセルビア人との協力関係の上にクロアチア自治州の政権を担っていた。こうした経緯から、クロアチアのセルビア人の一部には新政権とも協調したいと考える者もいた。だが、ウスタシャは政権を獲得すると同時にあらゆる分野でセルビア人の公職から排斥し、協調の可能性を一切否定した。さらにクロアチア農民党は地方社会と農民層の間に強固な支持組織をもっていた。しかし、ウスタシャは主要な幹部と本隊が長らく外国に亡命していたため、クロアチア人社会に草の根の組織をもたず、広範な民衆の支持を欠いていた。そのため、その運動は権力と暴力に依拠した強権的なものとならざるを得なかった。

ウスタシャの運動目標は「純粋なクロアチア人」だけから構成される民族国家を創出することであった。そのためにナチスの人種政策を真似て「不純分子」の一掃が計画された。これに含まれたのは、セルビア人、ユダヤ人、ジプシーなどであった。またたとえクロアチア人であってもウスタシャの運動を支持しない者はクロアチア人らしくない人間と見なされ、浄化の対象とされた。その典型は共産主義者や自由主義者のクロアチア人である。これらの不純分子のうち、最大のグループは何といても190万人を数え、同国の人口の3

分の1を占めると見られたセルビア人であった⁵。

ウスタシャの幹部は各地で政治集会を開催した。彼らは、外来の民族であるセルビア人の存在と行動がクロアチア民族にとっていかに有害で危険であるかを強調し、クロアチア独立国が生き残るためにはセルビア人問題に決着をつけることが必要だと繰り返した⁶。この主張に基づき、彼らはクロアチアからセルビア人を抹消する計画を実行に移した。その主要な手段は逮捕と殺害であった。ウスタシャ政権は旧王国軍の敗残将兵とその支援者の捕捉を名目に、ブルジョア政党の政治家、大地主、商人、正教会の聖職者、教職者、知識人などセルビア人社会で指導的地位にあった人びとを次々に逮捕した。彼らは各地に設置された特設の収容所に送られ、その大半は密かに処刑された⁷。一般のセルビア人住民についても、無実の罪を着せて集団的に逮捕し、殺害する行為が各地で実行された⁸。

セルビア人に対して逮捕と蛮行が開始されたことはクロアチアのセルビア人を驚かせた。しかし、4月から5月の出来事はまだ序の口であり、セルビア人に対する迫害が本格化するのは6月以降のことであった。これは、クロアチアが真の意味で独立国家ではなく実は枢軸国の従属国家であること、したがって、ウスタシャ政権が枢軸国の傀儡政権であることが国民の眼に明らかになったことと関係する。

第一に国家的な従属関係である。5月18日にウスタシャの首領パヴェリッチはイタリアのムッソリーニと共にローマ条約に署名したが、それはクロアチア側にとって屈辱的な内容に満ちていた。その最たる点は、イタリア側の要求に屈し、アドリア海に面する地域とその後背地(フルヴァツコ・プリモーリエの一部とダルマチアの大半)の領有をイタリアに認めたことであった⁹。また条約の第二文書で、クロアチア独立国は沿岸部とイタリア領の後背地に軍事施設を建設せず、また海軍力も原則的に保有しないことを約束させられた。これはイタリアの安全を脅かさないための措置であった¹⁰。

第二に経済的な従属関係である。建国後まもなく、ウスタシャ政権は枢軸国の経済的な要求を満

たすため、様々な義務を引き受けさせられた。ドイツとの最初の経済協定では労働力をドイツに派遣する義務を負い、別の協定では国内の鉱山と工業資源の無制限の利用をドイツ側に許可し、ドイツ軍の駐留経費の負担を承認した¹¹。同様にクロアチアはダルマチアに駐留するイタリア軍に対しても物資と経費の負担義務を負った¹²。この結果、ドイツとイタリアの需要を満たすために優先的に財貨が輸出に回された。しかし、そのために、国内で食糧や生活必需品の不足と高騰が発生し、ドイツへの労働力の徴用と共に国民の不満の種となった¹³。

クロアチア人の中では独立国家の誕生に対する一時の興奮は急速に冷め、ウスタシャ政権に対する失望が広がった。士気の低下はウスタシャの隊員の内部でも起こり、隊員のリクルートにも支障が出始めた。「ドモブラン」と呼ばれた国防軍兵士の召集も計画通りには進まない有り様となった。こうした状況に対し、ウスタシャ政権は、様々な宣伝活動で国民の不満をそらそうと躍起になった。とくに喧伝されたのがチェトニクの脅威である。その上で、ローマ条約が内政面ではフリーハンドをクロアチアに認めたことを利用し、ウスタシャ政権はセルビア人問題の決着を急ぐことでクロアチア人の信任を取り戻そうとした。彼らはすべての厄災の責任をセルビア人に帰し、セルビア人を一掃したあとには至福の状況が実現されると説いて、セルビア人に対する浄化政策を強化した¹⁴。

この結果、6月に入り、新たな集団逮捕の波が発生した。それはローマ条約の発効直後に頻度が高くなり、独ソ戦が始まった6月下旬に規模が大きくなった。この期間、ウスタシャ政権は、これまで見逃していたセルビア人の官吏、聖職者、知識人、職人に加えて、セルビア人農村で影響力のある農民を残らず捕捉し、殺害するか、収容所送りにした¹⁵。逮捕された人びとの財産は没収され、国庫に納入された。ウスタシャ政権は共産主義者の破壊工作を恐れており、独ソ戦の開始後には各地で共産党員とその支持者を大量に逮捕した。

ウスタシャ政権は6月下旬から逮捕の対象をセルビア人のすべての成人男子に広げた。これは、

一つにはドイツが直轄支配したスロヴェニア地方に住むスロヴェニア人をクロアチアに移住させる代わりにクロアチアのセルビア人を同じ数だけセルビアに移送することがドイツとの間で合意されたからであった¹⁶。しかし、セルビア人の移送はドイツが受け入れの中止を通告したため予定どおりには実現しなかった。セルビアにはクロアチアから避難民が殺到し、新たな受け入れの余地がなくなってしまうからである¹⁷。そのため、ウスタシャは手っ取り早く集団的殺害を拡大する方向に進んだ。クロアチア独立国からイタリア軍が撤退し、ウスタシャ政権の統治地域が拡大するに伴って、セルビア人居住地域での犠牲者の数は桁違いに大きくなり、それは反乱が起きる直前の7月下旬に頂点に達した¹⁸。

3 セルビア人組織化の二つの方向

ウスタシャ政権による迫害と蛮行に対し、都市部の市民層や指導者層のセルビア人の対応は、初期の時期において、二つに分かれた。その一つは、ウスタシャ政権に恭順の意を示し、様々な便益の提供と引き替えにクロアチア独立国の中での生き残りを確保しようとするものである。ウスタシャの側も当初は統治のために彼らの奉仕を選別的に利用しようとする態度があった。だが、ウスタシャは間もなくいかなる妥協をも許さない強硬路線に転じたため、この方法で生き残る道は閉ざされた。もう一つは、ウスタシャの手が及ばない隣国のセルビアもしくはイタリアが占領する地域に避難することであり、多数の者はこちらの道を選択した。

このうち、政治的に重要な役割を果たしたのが戦前からの政党指導者である。その中心的人物は、ユーゴスラヴィア急進連盟の所属の上院議員ニコ・ノヴァコヴィッチ-ロンゴであった¹⁹。そこで特筆すべきことは、彼らがクロアチア独立国内のセルビア人の政治的結集をめざすと共に、クロアチア独立国内のセルビア人居住地域の併合をイタリアに求める運動を開始したことである。たとえば、5月初めにノヴァコヴィッチはダルマチアの中心都市であるザダルとスプリットで署名活動をおこない、ダルマチアとリカのセルビア人10

万人の名においてこれらの地域の併合をイタリアに求める請願書をイタリア総督府に提出した。彼らの狙いはイタリアの庇護の下にセルビア人の自治区を形成することにあった。このあとノヴァコヴィッチの活動に同調する形で別の政治家も同様の趣旨の請願書を各地に駐留するイタリア軍の指揮官に提出し、イタリアの併合地域の拡大を求める運動はボスニアとヘルツェゴヴィナから避難してきたセルビア人政治家の間にも広まった²⁰。

イタリアにとってこの運動は歓迎すべきものだった。なぜなら、このときイタリアはクロアチア独立国との国境確定交渉の最中にあり、より多くの領土の獲得を狙っていたからである²¹。セルビア人政治指導者もイタリアの野心を計算した上で行動を起こしていた。イタリア側はセルビア人政治指導者の提案を受け入れ、その活動を積極的に支援する姿勢を示した。さらにイタリアは当初ウスタシャ政権によるセルビア人の逮捕と殺害を容認していたが、この姿勢を大きく転換した。イタリア軍はいくつかの駐留地域でウスタシャとその武装勢力を監督下に置き、セルビア人に対する蛮行を阻止した。かくしてイタリアはにわかに「セルビア人の保護者」のような振る舞いを始めた。

ウスタシャ政権はセルビア人が組織的な反抗を起こすことを内心恐れており、見方を変えると反乱の芽を摘むために集団的な逮捕と殺害を実行していた。イタリアはウスタシャ政権の弱点をよく承知しており、したがって、国境の確定後もセルビア人政治指導者の運動は大いに利用価値があると見た。クロアチア独立国に対して飽くなき領土的野心と政治的要求をもつイタリアは、クロアチアのセルビア人を取り込んでウスタシャ政権に揺さぶりをかけ、彼らの譲歩を引き出したいと考えたのである。加えてセルビア人の支持はイタリアが獲得した地域の統治のためにも有用であった。

6月になると、イタリア領内のセルビア人政治指導者はセルビア人の組織作りに着手した。その一つとして、ダルマチアの各地に「セルビア人難民支援委員会」が結成され、クロアチア独立国からの避難民に対し衣食住の世話をする活動を始めた。イタリア軍は軍用車両を使って避難民の搬送に協力する一方で、イタリアの統治機関はこの委

員会を認可し、財政的な支援と助言を与えた。しかし、この委員会の目的は単に難民支援だけではなかった。セルビア人政治指導者はこの委員会をイタリア領ダルマチアとクロアチア独立国全体のセルビア人を指導する政治機関としたいと考えていた。それゆえ、委員会が最初に設置されたスプリットは有力な政治指導者が結集する政治的なセンターとなった²²。

もう一つの注目すべき動向は、イタリアの要望と難民支援委員会の監督の下に半軍事的でファシスト団体的な避難民のキャンプが出現したことである。このキャンプではゆくゆくはクロアチア独立国内に派遣する目的で戦闘集団の結成と訓練がおこなわれた²³。このうち最大のキャンプはクロアチア領に近い北ダルマチアのキスターニェに設置され、各地の避難民を結集するセンターの役割を担った²⁴。避難民の間では出身地域ごとにリーダーが生まれた。なかでも、クロアチア領北ダルマチアからの避難民に対してはモムチロ・ジュイッチ（後にクロアチアにおけるチェトニク師団の総帥となる人物）が、リカ地方からの避難民に対してはステイーヴ・ラジェノヴィッチが影響力を強めた。その一方で、彼らはそれぞれの出身地域の都市と農村に使者を頻繁に派遣し、住民との結びつきを強めようとした。ウスタシャ政権によるテロの激化に伴って7月半ばにクロアチア南東部（クニンスカ・クライナとリカ）からより大量の避難民がイタリア領に向かったが、これには彼らの活動が影響を及ぼしていた²⁵。

7月に入り、極めて重大な事態が発生した。それは、ユーゴスラヴィアの東部地域、セルビアとモンテネグロで住民の武装蜂起が相次いで発生したことである。占領勢力に対する住民の反乱は瞬く間に両地域の全土に拡大した。イタリアはモンテネグロを実効支配していたので、この蜂起が共産主義者によって指導されていることを知っていた。共産主義者はクロアチア独立国内でも、とくにセルビア人の居住する地域で反乱の準備をしていた。このことは出身地の住民からの情報によってイタリア領のセルビア人政治指導者にも伝わっていた。これはクロアチアのセルビア人の指導者を自認する彼らにとって看過できない事態であっ

た。それゆえ、イタリアとセルビア人政治指導者は共に共産主義者による住民の取り込みを阻止し、共産主義者の運動に対抗できるような勢力の形成を急ぐことになった。

共産主義者が武力蜂起を開始したのは6月22日のドイツ軍のソ連侵攻をきっかけとしていた。それまでも共産党は敗戦による国家の崩壊を社会革命の好機と考え、占領勢力に対する武装闘争の準備をしていた。ところが、各国の共産主義運動を指導するソ連はドイツと不可侵条約を結んでいたため、共産党は占領勢力に対する攻撃の指示を控えていた。しかし、独ソ戦の開始に伴って、そのような制約はなくなった。7月4日、ユーゴスラヴィア共産党政治局は武装蜂起の実行を党員に指示し、占領勢力に対する抵抗運動（人民解放闘争）への参加を国民に呼びかけた。7月7日にセルビアで共産主義者の勢力と占領勢力との間で武力衝突が起こり、7月13日にはモンテネグロでも蜂起が起こった。

クロアチアの共産党員は、6月22日、独ソ戦が始まったその日に他の地域に先駆けて最初のパルチザン部隊を中部の都市シサクで結成し、鉄道の線路を破壊した²⁶。だが、民衆を巻き込んだ蜂起の実行はセルビアやモンテネグロに比べると遅れた。これは当初、クロアチア共産党指導部がコミンテルンの指示に影響され、都市部での破壊活動を重視していたからであった。しかし、敵方の防御が固い都市部でのゲリラ活動は多大の犠牲者を出した反面、それに見合う成果は得られなかった²⁷。セルビアやモンテネグロでは最高指導者のチトーの指示によっていち早く地方部でのゲリラ攻撃に戦術を転換し、大きな成果を挙げていた。そこで、これにしたがって、クロアチアの党指導部は戦術を見直し、農村部や山間部で蜂起の準備を始めた。彼らがとくに重点的な組織化の対象としたのは、ウスタシャ政権による抑圧とテロによって一大窮地に追い込まれていた地方のセルビア人であった²⁸。

蜂起の開始前、クロアチア共産党はユーゴスラヴィア共産党傘下の地域組織としては最大の党員数を抱えていた²⁹。これは一つにはクロアチアでは経済が比較的発展した地域が多く、労働者層

の集積が厚かったことによる。しかしながら、興味深い事実は、クロアチアにおける最初の住民蜂起は経済的な発展がもっとも遅れ、したがって党員の数もきわめて少ない地域で、しかもザグレブの党指導部の指示ではなく、地方党員のイニシアチブに依拠して起こったことである³⁰。

最初に蜂起が起こった場所はアドリア海沿岸を背にする山岳地帯（ディナール山脈）の裾野に広がるリカ地方の南東部、ドーニイ・ラパツツ郡の南部にあるスルブという小さな町であった。ドーニイ・ラパツツ郡はセルビア人の集落が多い地域であったので、他のセルビア人居住地域と同様に、ウスタシャによる住民の逮捕と殺害、略奪と破壊が横行した。4月から7月末までに殺害された人びとは900名を超え、これは住民のおよそ5.5%に当たると推定されている³¹。ウスタシャのテロを逃れるため、住民の多くは深い森の中に入り、仮設の避難所の中に身を潜めた³²。彼らの大多数は当初、無駄な抵抗をするよりは命を大事にした方が無難だと考えていた。それでも、長引く避難生活の中で人びとの意識の中にはウスタシャへの反抗の考えが芽生え始めた。これを大きく育て、現実の行動に転化させたのが共産主義者とそのシンパの活動であった。

ドーニイ・ラパツツの共産党組織は政権側による党員の集団逮捕によって弱体化し、スルブとその周辺地区には党組織はなかった³³。それゆえ、ジョコ・ヨヴァニッチをリーダーとするスルブの共産主義者が6月初めにとった行動は司令塔の立ち上げであり、「革命委員会」の結成であった³⁴。革命委員会は下部組織として各村に二、三名の委員からなる村民委員会の設置を予定し、共産党の運動の支持者の住民との連絡を取った。彼らは6月末から人の輪を広げ、各村の有力者との関係を深めた。ウスタシャが無差別テロを開始したとき、革命委員会は当初、行動の自重と武器の隠匿を住民に働きかけた。その上で住民の信頼を得た共産主義者は森の中に潜伏した民衆に対し、ユーゴスラヴィア王国崩壊の原因、ファシズムの性格と目的、これとウスタシャの蛮行との関係を説明し、生き残りたいと思うならば共産党の指導の下に戦いの準備を始めなければならないと説いた³⁵。

革命委員会は6月12日に西ボスニアのドゥルヴァールの党組織と関係を確立した。これは、スルブの共産主義者が同じく蜂起の準備をしていた西ボスニアの共産主義者と連絡をとり、その指導の下に連携行動をとったことを意味する。スルブは地理的にはボスニアとの境界に位置し、ボスニアの党組織の方が連絡を取りやすかったためである。7月20日、西ボスニアの共産主義者はボサンスコ・グラホヴォでスルブの共産主義者の同席の下に会議を開き、各地に武装のゲリラ部隊を結成し、これに優秀な指揮官と政治委員を配置する方針を策定した。民衆は戦いの覚悟ができていているという点で両地区の共産党員の見解は一致し、同時に蜂起を開始することを申し合わせた。これを受けて7月21日、スルブの革命委員会は周辺地域の各地に10個のゲリラ部隊を結成することを決めた。各部隊の指揮官と政治委員は革命委員会が決めるが、その他は各部隊で決めてよいとした³⁶。7月24日になって初めてヨヴァニッチらはクロアチア共産党の地方幹部（スルブの西方に位置する都市グラチャツツの地区委員会書記のゴイコ・ポロヴィナ）と遭遇し、その参加と協力を得ることになった³⁷。

4 集団蜂起の成功と問題現象の発生

スルブとボスニアの共産主義者は同時蜂起の実行を約束していたが、決起の日付は未定だった³⁸。しかし、7月26日、ボスニア側（ドゥルヴァール近郊の一集落）の集団が暴発し、司令部の指示なくウスタシャの隊員を襲撃する事件が起こった。ドゥルヴァールのゲリラ部隊司令部はウスタシャの報復を予想し、先制攻撃を仕掛けるために蜂起の決行を決断した。このことは直ちにスルブ側に伝えられた。革命委員会はこれに同調し、戦闘の開始を決定した。彼らは各地の部隊に作戦を指示したが、最初の課題はドーニイ・ラパツツの要所を制圧し、敵方の増援部隊の到来を阻止することであった。

1941年7月27日、クロアチアのスルブとボスニアのドゥルヴァールで同時にセルビア人の集団蜂起が起こった³⁹。ボスニア側のゲリラ部隊の加勢

の下にスルブのゲリラ部隊はウスタシャおよび憲兵隊の駐在所を一斉に襲撃し、彼らを逃亡させた⁴⁰。スルブはクロアチアにおける最初の解放地となった。これを拠点にスルブのゲリラ部隊は南北に作戦を展開し、8月2日にドーニイ・ラパツ郡全土を解放した。この間、スルブの革命委員会「スルブとその周辺地域のゲリラ部隊司令部」と名称を変更し、北部区域には「ドーニイ・ラパツとその周辺地域のゲリラ部隊司令部」が設置された。8月下旬にはドーニイ・ラパツの司令部はリカ地方全体の軍事的指揮を担当する司令部に昇格した。

反乱勢力がわずか6日間でドーニイ・ラパツ郡全土を解放した最大の要因はこの地域の政府側の武装勢力が約140名と少なく、その上各地に散在していたことである⁴¹。蜂起集団の接近を聞いたウスタシャ政権の地方幹部と隊員は狼狽し、戦うことなく隣のクロアチア人の町に逃亡した。第二にウスタシャ政権の武装勢力が本格的な戦闘の経験がなく、また殺傷能力の大きな重火器を保有していなかったことである。ゲリラ部隊の側も実戦経験はなかったが、兵士の数と士気でこれを補った。第三の要因は地域住民が比較的大量の武器を隠し持っていたことである。これは三ヶ月前のユーゴスラヴィア王国軍の崩壊と関係する。この地域から召集された兵士の多くは武器を持って自分の家に逃げ帰っていた。また住民はこの地域を通して退却した部隊の兵士から食料と交換に武器を入手していた⁴²。戦闘に勝利したゲリラ部隊は敵方が保有していた武器を押収し、戦力を増強して次の戦闘に臨んだ。

このあと短期間の間にセルビア人の集団蜂起は、クロアチア人が比較的に多いスラヴォニア地方とイタリアが併合したダルマチア地方を除いて、クロアチアにおけるセルビア人集住地域のほぼすべてに広がった。住民の蜂起は、ローマ条約への反感を背景にアドリア海沿岸部とその後背地（ダルマチア、フルヴァツコ・プリモーリエ、ゴールスキー・コートル）の一部で、クロアチア人農民の間からも起こった⁴³。どの地域でも蜂起の準備を担当したのは共産主義者であった。地方の貧しい農民は共産主義に警戒心がなく、共産主義者

が指導的役割を果たすことを疑問視しなかった。むしろ、彼らは同じスラヴ人の国であるソ連に親近感を感じており、共産主義者の指導を素直に受け入れた⁴⁴。

反乱はイタリア軍が撤退した地域で起こった。そのため、戦闘の相手はまだ戦力が手薄であったウスタシャ政権の武装勢力に限定され、反乱勢力は予想以上の戦果を挙げることができた⁴⁵。南部地方の拠点都市ではウスタシャ政権の統治機構が次々と崩壊し、ウスタシャの部隊とドモブラン（クロアチアの国防軍）は敗走を重ねた。

この結果、クロアチアの南部にはいくつかの解放区が形成された。このうち最大の解放区はリカ地方南部とダルマチア地方北部（クニンスカ・クライナ）であり、それはボスニア西部（ボサンスカ・クライナ）の解放区と連なっていた。しかし、セルビア人の蜂起集団を共産主義者がどの程度掌握しているかは地域的に一様ではなく、また同じ地域の内部でも相違があった。これは一つには地域によって共産党員とそのシンパの数と関与の度合いが違い、また部隊の編成の仕方が異なっていたからであった。大きく分けると、クロアチアの中心部に近く多くの共産党員が蜂起に加わり、地方組織および中央組織の党幹部の影響力が大きかったコルドウンおよびバーニャ地方では、共産主義者による統制力は強く、蜂起はより統一的に実行された。だが、共産党員が少ないリカ南部とイタリア領に近い北ダルマチアでは共産主義者による蜂起集団の統制力は弱かった。そのため、これらの地域では共産主義者、とくに党指導部のサイドから見て様々な問題現象が発生した。

大きな問題の一つは集団蜂起の開始と同時にクロアチア人に対する蛮行が発生したことである。セルビア人の蜂起集団はウスタシャ政権の武装勢力だけを攻撃の対象としたのではなかった。彼らは同じ地域に住んでいた民間人のクロアチア人にも襲いかかった。各地で多くのクロアチア人が惨殺され、略奪を受けた。クロアチア人住民の家屋は破壊され、集落全体が焼き払われることもあった⁴⁶。この地域のクロアチア人の中にはウスタシャの隊員や地方幹部の一員となり、セルビア人の逮捕と殺害に関わった者がいた。それゆえに、

セルビア人は彼らに報復をしたいという気持ちを強く抱いていた。しかし、その際セルビア人の蜂起集団はウスタシャとクロアチア人を区別せず、クロアチア人全体をウスタシャの仲間だと見なし、蛮行に及ぶ傾向があった⁴⁷。

セルビア人の集団蜂起が起こった地域ではクロアチア人は少数派だった。地方のウスタシャ政権は十分な防衛力を有していなかったため、反乱が起きるとウスタシャの隊員や地方幹部の多くは真っ先に逃亡しようとした。これに続いてクロアチア人の住民も戦禍を逃れるため、大挙してより安全な地域に避難を始めた。だが、逃げ遅れた者や何らかの事情で地元に残った者の多くは蜂起集団による無慈悲な攻撃にさらされることになった。ボスニア・ヘルツェゴヴィナに多かったイスラム教徒のスラヴ人（ムスリム人）もクロアチア人とはほぼ同じ状況にあり、同様の運命をたどった。このため、反乱勢力による解放区の形成とは見方を変えればセルビア人武装勢力による「民族浄化」の進行であった。

蜂起を指導した共産主義者の側から見ると、このことは意図せざる結果であり、また克服しなければならない否定的な現象であった。なぜなら、セルビア人の民族自治区の形成は彼らの目標ではなかったからである。これはイタリア領に避難したクロアチアのセルビア人政党指導者とチェトニクの指導者の目標であった。共産主義者の目標はユーゴスラヴィアの全人民と全国土を解放することにあり、そのためにはこの国の全民族を人民解放運動に参加させ、一致協力して占領勢力と戦わせる必要があった。とくに二番目に数が多い民族であるクロアチア人を人民解放運動の隊列に取り込むことは必要不可欠であった。ところが、セルビア人の集団蜂起が起こった地域では当初、クロアチア人民衆を人民解放運動から遠ざける事態が進行していた。

もう一つの大きな問題は、共産主義者の指導に従わない個人や派閥の台頭である。すでに述べたように、セルビア人農民の多数は共産主義者に信頼を寄せ、その指導を素朴に受け入れた。だが、当然のことながら、セルビア人住民の中には共産主義者とは異なった考えをもつ人びとがいた。彼

らは蜂起の準備段階では共産主義者の方針に反対を唱えることはなく、その指示に従って蜂起集団に加わった者が多かった。しかし、集団蜂起が始まると同時に親チェトニクの志向を顕わにし、共産主義者の指導に抵抗を示すようになった。

このことを最初に蜂起が起こったドーニイ・ラパツ郡について見ると、反共産主義者勢力の台頭の背景として二つの事情を指摘できる。一つは、蜂起の三ヶ月前に起こったユーゴスラヴィア王国の崩壊後に同地域から外部に仕事に出ていた人びとが次々に帰郷したことである。その中にはスルブの集団蜂起を指導した革命委員会のコア・メンバーも含まれていたという興味深い事実もあるが、もっとも数が多かった一団は旧ユーゴスラヴィア王国の奉職者であった。具体的には、旧王国軍の将校、下士官、警察官、憲兵隊員、政府の役人など戦前に共産主義運動を弾圧する側に属し、親チェトニクの志向を強くもつ人びとである⁴⁸。これに加えて、各町村には戦前からの保守的な政治家や人物が残っていた。彼らは地域の有力者であると同時に、イタリア領ダルマチアに避難したセルビア人政党指導者ともつながりが深い人びとであった。

二つ目は、共産主義者はゲリラ部隊の統率者の地位のすべてに信頼できる人物を配置できたわけではなかったことである。これは一つには彼らがそれだけの数の人材を有していなかったからであるが、もう一つの重要な要因としてゲリラ部隊の統率者の選任が基本的には住民自身による自主管理に委ねられていたことがある。とくに末端で兵士を動かす班長と小隊長はゲリラ部隊の隊員によって選ばれた。だがこれは、結果的には押しの強い人物が自らその地位に就くことを許すことになった。とくに帰郷していた旧王国の軍隊や警察の関係者はその職業柄、自薦他薦で蜂起集団の統率者の一員に加わった⁴⁹。そのため、ゲリラ部隊の統率者の中には親チェトニクの志向をもつ人物が入り込むことになった⁵⁰。したがって、集団蜂起は大きな成功を成し遂げたが、まさにそれがゆえに共産主義者は最初の二、三日が経つとゲリラ部隊を完全には統制できなくなっていた。

セルビア人の蜂起集団における親チェトニクの

な勢力は、次に見るように、イタリア軍の介入が始まるとともに勢力を増した。彼らは、イタリア領ダルマチアから帰還したより明確にチェトニクの志向性をもつ勢力と合体ないし協働し、抵抗運動を破壊する動きを示すようになった。

5 イタリアの介入とチェトニクの出現

7月27日に南リカのスルブと西ボスニアのドゥルヴァールで同時に発生した集団蜂起は、一見するとウスタシャ政権の恐怖政治に対するセルビア人民衆の怒りの爆発のように見えた。しかし、それは共産主義者が周到に準備した組織的な反乱であり、占領勢力に対する抵抗運動の始まりであった。共産主義者はすでにこの国の他の地域でも民衆を巻き込んだ武装蜂起を起こし、占領勢力との戦いを始めていた。このことをよく知るイタリアは反乱勢力の矛先がやがては自分たちに向けられることを察知していた。とくに反乱はイタリアが併合したダルマチアに近接する地域で起こっており、彼らの警戒感は大きかった。それゆえ、イタリアはすぐに介入を決意し、行動を始めた。

その際、イタリアの介入の仕方には二つの特徴があった。その第一は、ドイツがセルビアでおこなったように最初から公然と武力を行使するのではなく、友好的な態度をまず示して地域住民の抵抗を和らげ、できるだけ少ない戦力と犠牲によって反乱を鎮圧しようとしたことである。イタリアは反乱が起きるとすぐにイタリア領に近接する地域に使者や仲介者を放ち、住民に対して蜂起の理由を質すと共に「イタリア人はセルビア人の友人であり、ウスタシャを追い出す手助けをする」と伝えた。その一方で彼らに刃向かった場合には容赦なく武力を行使する態度もちらつかせ、無駄な抵抗をしないでイタリア軍の進駐を受け入れるように暗黙裏に促した。

第二に、この点でもドイツのやり方と大きく異なるのであるが、蜂起部隊の中で親イタリア派の勢力を台頭させ、反乱勢力を内部から崩壊させようとしたことである。そのために先兵の役割を引き受けたのがイタリア領ダルマチアに避難していたセルビア人のショーヴィニストであり、後

のチェトニク部隊の指導者たちである。共産主義者による住民の取り込みを阻止するためにこれらのセルビア人の協力を得ることはイタリアにとっては規定の方針であったが、反乱勢力が出現した以上、今度はこれを破壊することが彼らの任務となった。彼らは蜂起部隊の隊列に加わっていた親チェトニクの志向をもつ人びとと結合して反乱勢力の指揮権を奪い、蜂起の性格と目的を変質させることを期待された。

共産党の基本方針は、占領勢力との戦いの上でクロアチア独立国内のセルビア人とクロアチア人とを一致協力させ、共闘戦線（人民解放運動）を創出することにあつた。このことをイタリアは共産党の活動の分析からよく承知していた。しかし、蜂起が始まった南リカと西ボスニアではセルビア人蜂起集団の攻撃対象はウスタシャ政権とその武装勢力に限定され、クロアチア人はまだ蜂起に加わっていなかった。それゆえ、イタリアは戦いの構図をこの関係に止め、反乱がクロアチア人民衆に広がる前に共産主義者の計画を崩壊させたいと考えた。そのために、イタリアは住民の反乱を自治権の獲得を目的としたセルビア人の民族運動に変え、その要求をイタリアの後見の下に実現することによって、抵抗運動を終息させようとした。これはまさにチェトニクの指導者たちの望むところであった。

7月31日、イタリアは北ダルマチアの要衝都市クニンの統治権をウスタシャ政権から譲り受け、周辺地帯に部隊を配置して防御を固めた。8月3日、イタリアは北方のクニンスカ・クライナと南リカ方面に向け、部隊を出動させた。彼らはこれと相前後して、イタリア領ダルマチアの難民キャンプにいた親イタリアのセルビア人集団を車両で輸送し、それぞれの郷里へ帰還させた。彼らはイタリアの指示を受け、イタリア軍の進駐に対する住民の抵抗を和らげる宣伝部隊の役割を担った。その中には7月23日にベンコヴァッツでイタリア政府代表から特別の任務を授かった後のチェトニク部隊の指導者が含まれていた⁵¹。彼らはキスターニエの難民キャンプで軍事訓練を受けていた避難民のリーダーであり、帰国と同時に各地区のゲリラ部隊の指導的地位に就いた⁵²。

この地域のゲリラ部隊を統括するドゥルヴァールの司令部は、チェトニクがイタリアからどのような任務を授かっているのかを知る由もなかったため、ゲリラ部隊の指揮官の交代を承認した⁵³。8月4日にドゥルヴァール司令部の決定により「クニンスカ・クライナのゲリラ部隊司令部」が設置された。その司令官に就任したのはジフコ・ブルコヴィッチである。彼は、与えられた権限と民衆の間での信望をフルに活用し、各村のゲリラ部隊の統率者に親チェトニク的な志向ないし大セルビア主義的な志向をもつ人物をできるだけ数多く登用した。ブルコヴィッチは表向き占領勢力と戦うことを公言し、共産主義者が支配するドゥルヴァールの司令部を上級司令部として認めていたが、実際には最初から蜂起集団の中でチェトニクの影響力を強める活動を慎重に始めた⁵⁴。

南リカでは、7月末にキスターニェから戻ったステイーヴ・ラジェノヴィッチのグループが同様の方法でイタリアに対する義務を果たそうとした。クニンスカ・クライナと比べると南リカでは共産主義者の影響力は大きかったが、その中でも彼らは共産主義者の統制力が比較的弱いドーニイ・ラパツとその周辺部を活動拠点とした。ラジェノヴィッチは戦前に国会議員を務めた有力な政治家であり、この町の親チェトニク的な志向をもつ人びとを仲間に取り込んで、イタリアをセルビア人の友人・保護者として擁護する一方で、ウスタシャ政権を激しく攻撃する宣伝活動を盛んにおこなった。ドーニイ・ラパツのゲリラ部隊司令部はこの地域の解放後に結成されたばかりであったが、ラジェノヴィッチらはこの地域の農村や集落を単位とするゲリラ部隊の統率者に旧王国軍の下士官や旧政府の憲兵隊員および役人を配置することに成功した。彼らはすべて占領勢力との戦いには消極的な人びとであった⁵⁵。

イタリアの介入は初期段階としては上出来だった。軍事的には戦闘を行うことなく、クニンスカ・クライナとリカの一部で重要な陣地を制圧しながらクロアチア中部のカルロヴァツまで進駐し、主要な補給路を確保した。政治的には進軍中に各地で親イタリア勢力を発生させ、反乱勢力がイタリアを攻撃対象とする勢力に転化することを

防ぐことができた。この成功には二つの要因が寄与していた。第一に蜂起集団の間に日和見主義が広がっていたことである。これはイタリア領から戻った避難民グループの親イタリアによる宣伝活動が功を奏していたからであるが、反乱を起こした住民が自らの勢力にまだ自信が持てず、「大国」と考えられたイタリアと戦うことに躊躇した結果でもあった⁵⁶。第二に蜂起集団の司令部が戦術的にウスタシャの勢力との戦いを優先したことである。この時期にはドゥルヴァールのゲリラ部隊司令部は南方（グラチャツ）からのウスタシャ政権側の反撃を撃退しながら、西ボスニアに残る彼らの拠点（ターレン・ヴァクフとビハチ）を制圧することに全力を注いでいた。

この間、クニンスカ・クライナでは蜂起勢力に対する指揮権をチェトニクの指導者が握り、ゲリラ部隊の大半は実質的にはチェトニクの部隊に変容した。しかし、これ以外の地域では蜂起勢力に対する指揮権は依然として共産主義者の掌中にあり、チェトニクの影響力は局地的なものに留まった。イタリアの介入も拠点都市を結んだ線的な統制を達成しただけであり、面的な広がりをもたなかった。チェトニクはイタリア軍に依拠しなければ共産主義者に対抗できなかったため、セルビア人の全居住地域をイタリアが占領することを望んだ。イタリアの側も共産主義者が主導する抵抗運動を早い段階で破壊するため、クロアチア独立国内の領土の再占領が必要だと判断した。作戦の遂行を容易にするため、イタリア軍は地元のセルビア人政治家とチェトニクにこれまで以上に大きな貢献を求めた⁵⁷。

8月下旬、西ボスニアと南リカの蜂起部隊の主力勢力はウスタシャの勢力の攻勢を撃退し、西ボスニアの解放区に残るウスタシャの武装勢力を壊滅させた。このあとドゥルヴァールとスルブのゲリラ部隊の司令部はもう一つの敵であるイタリアとの戦いを避けて通ることができなくなっていた。親イタリアのセルビア人グループの活動が活発化するに伴って、彼らの活動の危険性を共産主義者の側が否応なしに悟らされたからである。彼らの正体を民衆の前に明らかにし、蜂起勢力の間にある日和見主義を打破するためには、占領勢力

と戦う方針を明確に打ち出す必要があった。加えて、そもそも彼らが始めたゲリラ的な抵抗運動は敵と果敢に戦い、その力を略奪していかなければ成長できないことを共産主義者自身がよく承知していたからである。

8月30日、マルコ・オレシュコヴィッチ（クロアチア共産党中央委員会委員）の提案により、西ボスニア、リカ、クニンスカ・クライナの全町村におけるゲリラ部隊の代表者会議がドゥルヴァールで開催された。この会議では、今後の活動方針が徹底的に討論され、セルビア人とクロアチア人の結束の実現に重点を置くこと、イタリアが領土の再占領を始めたときには彼らとの戦闘を開始するという方針が提起された。クニンスカ・クライナの代表は先頭に立って反対し、これにリカと西ボスニアの一部の代表が同調した。しかし、彼らは少数派にとどまり、イタリアに対する主戦論を覆す力はなかった。クニンスカ・クライナの代表は上述の方針を受け入れ、占領勢力との戦いを誓った。

これを踏まえて、ドゥルヴァールの司令部はクニンスカ・クライナのゲリラ部隊にボサンスコ・グラホヴォの部隊と連携してイタリア軍の侵入を防ぐ作戦を指示し、了解を得た。しかし、クニンスカ・クライナのゲリラ部隊の指揮官であったブルコヴィッチとジュイッチは事前の計画に従って攻撃を仕掛けず、9月4日、イタリア軍はボスニアと境界に位置する町ストルミツァに侵入した。このことにドゥルヴァールの司令部は激しく反発したが、ブルコヴィッチらはもっと大きな目的のための戦術だと主張し、これは一定の説得力があったので新たな作戦が決定された。ところが、この作戦を開始する直前に彼らはクーデターを起こし、配下の部隊に命じてその他のゲリラ部隊がイタリアを攻撃しないように威嚇した。イタリアと戦うつもりでいた部隊はこれに驚き、退却せざるを得なかった。こうしてイタリア軍は戦闘を行うことなくボサンスコ・グラホヴォに侵入した⁵⁸。

この裏切りによって、クニンスカ・クライナのゲリラ部隊の指導者は共産主義者の指揮に服さない独自の集団とその武装勢力の存在を公然と示すと同時に、人民解放運動と敵対する勢力の存在を

明らかにした。すなわち、組織としてのチェトニクの公然化の開始である。

6 チェトニクとパルチザンの分岐点

クロアチアにおける集団蜂起は共産主義者が準備し、その指揮の下に開始された。共産主義者の呼びかけに応じて蜂起に参加した地域住民の大半はセルビア人の農民であった。だが、蜂起に参加した人びと、とくに戦闘集団の統率者を務めた者の個人的な志向性は多様であった。共産主義者のシンパであった労働者もいたが、最初に蜂起が起こった南リカのドーニイ・ラパツ郡では旧王国軍の将兵や憲兵隊員、警官や役人など職業柄、反共産主義者で親チェトニクが強いと見られる人物も多かった。したがって、反乱が開始された段階では蜂起集団は全体として明確な目的や方向性をもたず、対立する志向性をもった諸個人が混在する状態であったと考えられる。蜂起の参加者はウスタシャを攻撃し、これを彼らの居住地域から追放するという一点で結束し、共産主義者の指導を受け入れて行動を起こした。

このように考えると、集団蜂起が開始された時点ではチェトニクは明確に組織された集団としては存在しなかったことになる。たしかにクロアチアの研究者が指摘するように、ゲリラ部隊の統率者の中には後にチェトニク部隊の指揮官として知られる人物が名を連ねていたことは事実であろう。それは上述のドーニイ・ラパツ郡の事情からも容易に推察されることである。しかし、それは親チェトニク志向の個人の存在を物語る事実であっても、チェトニクの組織の存在を意味する事実だと見ることはできない⁵⁹。クロアチアにおけるチェトニクは、イタリア領ダルマチアから特別の任務をもってセルビア人ショーヴィニスト集団が帰郷し、その任務に沿って一連の行動を起こした結果として初めて組織化が始まったと考えられるからである。

ただし、蜂起集団を指導した共産主義者も認めるように、前線で戦闘をおこなった兵士の行動を支配した動因はウスタシャに対する激しい怒りと報復の感情である。その際、彼らはしばしばクロ

アチア人およびムスリム人をすべてウスタシャかその協力者と見なし、武装勢力と民間人とを区別することなく攻撃の対象とし、蛮行に及んだ。攻撃を受けたクロアチア人とムスリム人から見れば、セルビア人の蜂起集団はその指揮者が誰であるかに関係なく、残忍なテロ集団だったと考えられる。彼らは厳密にはまだチェトニクの集団と見なすことはできないが、その手前の段階（いわば萌芽状態としてのチェトニク）にあり、明確な目的とイデオロギーを注入されると容易にチェトニクの単位となる可能性を秘めていたと見ることができる。初期のセルビア人の蜂起集団は概して「プロト・チェトニク」であったと理解すれば、共産主義者が指導したゲリラ部隊とチェトニクの指導者が率いたゲリラ部隊の間に差を見いだすことができないとされるのは当然である。この意味において、初期の蜂起集団の同質性を強調するクロアチアの歴史研究者の主張は支持することができる。

共産党の基本方針は、占領勢力との戦いの上でクロアチア独立国内のセルビア人とクロアチア人とを一致協力させ、超民族的な共闘戦線（人民解放運動）を創出することにあった。共産主義者にとって占領勢力の一員であるイタリアはどうしても打倒しなければならない敵である。これに対して、チェトニクはイタリアの庇護の下にセルビア人の自治区域を樹立したいと考え、ウスタシャ政権のみを戦いの相手と見なした。彼らにとってクロアチア人は皆、ウスタシャかその協力者であった。

それゆえ、当初に未分化であった蜂起集団はまもなく共産主義者とチェトニクの指導者によって二つの問題に回答を求められ、それぞれから強力な組織化を働きかけられて、相対立するグループに分化していくことになった。一つは占領勢力、とくにイタリアと戦うかどうかということである。もう一つはウスタシャとクロアチア人を切り離して考え、反ウスタシャのクロアチア人を占領勢力に対する戦いの同志として受け入れることができるかどうかである。

ブルコヴィッチとジュイッチの裏切りの後、ドゥルヴァールのゲリラ部隊司令部は彼らの行

為を非難しつつ、クニンスカ・クライナの残りのゲリラ部隊にイタリア軍への攻撃を命じた。これらの部隊の指揮官は表向きこの命令を受け入れたが、司令部の再三の督促にもかかわらず、イタリア軍への攻撃を実行しなかった。なぜなら、すでに彼らの大半はチェトニクの指導部に取り込まれ、そこから行動の指示を受けていたからであった。このような対立に対して末端の兵士の間には動揺があった。チェトニクの指導者は強力な宣伝活動を展開し、セルビア人は平和な生活を必要とし、その保護者であるイタリアを攻撃することはあり得ないと説いた。ゲリラ部隊は瓦解を始め、隊員はそれぞれの村や町に帰っていった。チェトニクの指導者はこれらに人びとを改めてチェトニクの部隊に組み込んでいった⁶⁰。

リカ地方においてもチェトニクの指導者は精力的に宣伝活動をおこない、蜂起集団をチェトニクの組織に取り込もうとした。しかし、共産主義者の影響力が強いこの地域はクニンスカ・クライナのような事態は起きなかった。リカの党組織は9月11日に党員会議を開催し、蜂起集団に対するこれまでの指導の問題点を徹底的に討議した。そこで出された結論は、地域レベルでの政治活動を強化し、住民に対するイデオロギー的な方向付けを強力におこなうことであった。多くの町村で党組織が再建され、新規に建設された。同時に党のシンパの組織として青年組織（共産主義青年同盟）や婦人組織（反ファシスト婦人同盟）の支部組織が各地域に設置され、党の活動を補助した⁶¹。

上述の会議でももっと注目すべき事柄は、ザグレブから派遣された党幹部（中央委員会委員作戦指導部長のヴラド・ポボヴィッチ）の提案により、パルチザン部隊の結成が決まったことである。共産主義者はまずこの地域の最良の兵士40名を選抜し、リカ地方最初のパルチザン部隊（「レーテチ部隊」）を結成した。共産党員によって構成されたシサクの第一パルチザン部隊と異なり、非党員の住民から部隊を構成した点が抵抗運動の新しい段階を告げる特徴である。その統率者にはこの地域で最初に蜂起を指導したスルブの革命委員会のメンバーが配属された（指揮官はジョコ・ヨヴァニッチ、政治委員ミラン・シーヤン、副指揮官

ドゥシャン・ダムヤノヴィッチ)。隊員には政治教育が施されると共に、軍律に従って行動することが求められ、上官の許可なく陣地を離れることは出来なかった。彼らはその他の部隊の模範となるべく規律正しく行動し、地域住民にも好感を与えた⁶²。

9月半ばには共産主義者が指導するゲリラ部隊とイタリア軍との間で戦闘が始まった。西ボスニア北部のビハチには3000名のドモブラン（クロアチア国防軍）と400名のウスタシャの部隊が結集していた。彼らは北方からリカと西ボスニアのゲリラ部隊に攻勢をかけ、イタリア軍は南方から攻撃を仕掛けた。反乱勢力と占領勢力との戦闘が激しさを増す中で、二つの対立する勢力へのセルビア人地域住民とその武装集団の分化はいつそう進んだ。

9月21日には軍事代表者の会議が招集され、リカ地方の統一的な指導部が選出されると共に、各町村のゲリラ部隊をパルチザン大隊の小隊として再編することが決められた。この会議を指導したクロアチア共産党幹部のマルコ・オレシュコヴィッチは結語を述べ、次の課題を指摘した。第一にクロアチア人民衆をこちらの陣営に引き込んで戦いを拡大すること、第二に占領勢力との戦いにおいてクロアチア人とセルビア人の共同戦線を形成すること、第三に主要な敵であるイタリアに断固たる戦いを挑むこと、第四にゲリラ部隊の内部にある日和見主義とチェトニク分子の危険性と戦うことである。リカ地方全体の部隊を指導する政治委員にはオレシュコヴィッチが選ばれた⁶³。

チェトニクの陣営では、10月初めにイリヤ・トリフノヴィッチービルチャニンがダルマチアのスプリットに到来した。ビルチャニンはチェトニク運動の戦前からの指導者であり、独自のルートでロンドンの亡命政府と接触し、その指示を受けていた。彼は直ちにこの地域に避難していたセルビア人政党指導者と会合し、チェトニクの運動の拡大とその武装組織の創設に乗り出した。彼は、難民支援委員会をチェトニク運動の政治センターとしての「セルビア国民委員会」に発展させ、その下に「ヘルツェゴヴィナ、ダルマチア、西ボスニア、リカのチェトニク部隊司令部」を創設、自らを司

令官とした。ビルチャニンはダルマチア地方にいた旧王国軍将校に国王の名において召集をかける一方で、リカおよびクニンスカ・クライナのチェトニク部隊の指揮官をスプリットに招いた。彼はジュイッチらのこれまでの活動を裁可し、それぞれの指揮する部隊ごとに数名の王国軍将校を配置した。前線のチェトニクの指導者は新しい権威付けを得て、セルビア人住民の間での組織活動を強化した⁶⁴。

リカ地方、西ボスニア、ダルマチアの三地域が隣接する三角地帯はクロアチア独立国の中で最初に集団蜂起が展開された地域であるが、同時にこの地域は共産主義者の勢力とイタリアおよびチェトニクの勢力が政治的にせめぎ合い、地域住民と蜂起集団に対する主導権を奪い合う地域となった。両者のせめぎ合いはやがて他のセルビア人居住地域にも広がった。その結果については、共産主義者の勢力が優勢であった。クロアチアについては、チェトニクはクニンスカ・クライナを抑えたが、その他の地域については、一部の地域にしか勢力を拡大できなかった。

このことはセルビア人の大半はイタリアと戦う路線を支持したことを意味する。しかし、共産主義者が提起したもう一つの問題であるクロアチア人との共闘の実現は困難な課題であった。戦闘部隊に政治委員長として配属された共産党員は隊員に対し、人民解放運動の性格やセルビア人とクロアチア人との共闘の意義と必要性を粘り強く説いた。これは、クロアチア人を占領勢力から解放するためにも戦わなければならないことを意味した。だが、前線のセルビア人兵士の最大の関心事は自分たちとその家族の生命と財産を守ることであり、それ以上の仕事の要求、とくにクロアチア人のために戦うことには少なからぬ抵抗感があった。

無学で素朴なセルビア人農民は共産主義者の指導に素直に従ったが、その反面、その純朴さの故に彼らは状況次第ではいつチェトニクの陣営に取り込まれるか分からない不安定な存在であった⁶⁵。この意味で、共産主義者のグループに引き込まれたセルビア人の蜂起集団はチェトニクのグループとは袂を分かったが、初期の段階ではこの

分化はまだ確定的なものではなかったと考えられる。

7 おわりに

はじめにの部分で述べたように、私は、そもそもユーゴスラヴィアにおける抵抗運動は何であったのかを改めて考え直してみる必要があると考え、その一つの手がかりを得る目的で本稿を作成した。その結果、初期の蜂起集団の性格について、クロアチアの研究者とは異なった解釈の仕方を提示した。しかし、セルビア人の蜂起集団の実態に関してはなお不明な点が多く、以上の考察だけでは不十分なことはよく承知している。今後、さらに事実確認を徹底させていきたい。

その上でもなお、私の仮説、チェトニクもパルチザンも当初は実体として存在せず、抵抗運動の展開の過程でそれぞれの本来の姿に明確化していったという仮説に基づいて歴史的に起こったことがどう評価されるのかが問われるのかもしれない。その場合、蜂起と同時に発生したクロアチア人虐殺に対する共産主義者の責任をどう見るのかという問題が提起される。これに対しては、たとえばパルチザンとしての組織化が明確でなかったとはいえ、蜂起集団を指導したのは共産主義者であった以上、彼らの責任は免れないと私は考える。

もっとも、初期の段階で蜂起集団によってクロ

アチア人に対する残虐行為があったことは共産主義者も認めており、社会主義時代の文献にも記述されている事実である。だから、このこと自体は近年明らかになった新事実ではない。しかし、それと共に重要な事実は、この残虐行為に対して何の責任追及もなされてこなかったということである。おそらくそれはできなかったということであろう。初期の段階の蜂起集団はもっぱらセルビア人で構成されており、彼らは、ウスタシャがおこなったセルビア人に対する残虐行為に対する報復の意志を強くもっていた人びとであった。共産主義者は抵抗運動をクロアチア人に広げる上で問題だという認識はあっても、これを犯罪的行為として処罰することはできなかった。抵抗運動を継続していくためには、それはやむを得ない現象として容認せざるを得なかった。

しかし、このようにセルビア人による残虐行為が不問に付せられたことは、その後どのような影響を与えたのかが私には大きな問題のように思われる。この点を含めて、本稿で提示した仮説が、その後の抵抗運動の展開にどのような影響を与え、ひいては戦後のクロアチアにおけるクロアチア人とセルビア人との関係にどのような関係を与えたのかを明らかにする必要があると考える。いずれも次稿以降の課題とさせていただきますと思う。

注

¹ チェトニク (Četnik) は現地語で「部隊」(Četa) に加わった人びとを意味し、遡れば19世紀の初めにトルコの支配に反抗して蜂起したセルビアのゲリラに端を発し、バルカン戦争 (1912-13年) および第一次世界大戦においてセルビア軍の指揮下に戦闘に参加した非正規部隊を指した言葉である。大戦間期にはチェトニクはコスタ・ペチャニッツを指導者とする愛国者の運動として受け継がれたが、あまり大きな広がりを見せなかった。

² Internet Novine Serbske, December 22, 2004, Vjesnik, 3. 15. 2005.

³ Zdravko Dizdar, Mihael Sobolevski, Prešućivani četnički zločini u Hrvatskoj i u Bosni i Hercegovini : 1941-1945.,

Hrvatski institut za povijest, Zagreb, 1999, pp.113-114.

⁴ ドゥルヴァールで生き残ったクロアチア人は20数名であり、すべて共産黨員および共産主義青年同盟員とその家族であった。ボサンスコ・グラホヴォでは一人のクロアチア人も残っていなかった。クロアチア人の大量虐殺は同じく西ボスニアのクルニェウシャというカトリック教徒の多い町とその近郊でも起こった。1941年8月2日にゲリラ部隊はこの町への攻撃を開始し、1週間でこれを制圧した。このあと、ゲリラ部隊の兵士は居合わせたクロアチア人住民を婦女子や老人を含め見境なしに殺害し、すべての家屋と教会に火を放ったとされる。この町と周辺地域には1244人のカトリック教徒がいたが、殺害さ

れた人びとの数は確定していない。何とか逃げることができたクロアチア人住民は戦後になっても帰郷を許されなかった。そして、反乱が開始されて間もない時期の西ボスニアにおける最大の惨事は9月初めにクーレン・ヴァクフで起こった。この町はドモブラン（クロアチア独立国の国防軍）の駐屯地があり、ウスタシャ政権の拠点地域の一つだった。9月5日、ボサンスカ・クライナとリカのゲリラ部隊は合同でこれを攻撃した。戦闘に勝利したゲリラ部隊は町中に避難していた周辺地域の住民約3000人を捕虜としたが、この後住民に対する虐殺が始まった。1000人以上のムスリム人と数百人のクロアチア人が殺害され、命を助けられたのは450人から500人程度の婦女子だけだった（*ibid.*, pp.114-117, なおディズダルが脚注で示している文献は次の通り。Anto Orlovac, *Trinaest ugaslih svjeteća-Župe Banjalučke biskupije nestale u drugom svjetskom ratu, Crtajte granice ne precrtajte ljude, Zbornik radova u povodu imenovanja visokobosanskog nadbiskupa Vinka Puljića kardinalom, Studia Vrhbosniensia 7, Sarajevo-Bol, 1995, pp.596-599, Ante Mile Krvavica, Svjedok sam četničkih zločina u Grahovu, "Slobodna Dalmacija", 10.08, 1995, Luka Pavičić, *Kronika stradanja Hrvata južne Like-Dopuna i ispravci, Zagreb, 1997, p.64*).*

⁵ Fikreta Jelić-Butić, *Ustaše i Nezavisna Država Hrvatska : 1941-1945, Sveučilišna naklada Liber i Školska knjiga, Zagreb, 1977, p.165, Hrvoje Matković, Povijest Nezavisne Države Hrvatske, Zagreb, Naklada P.I.P. Pavičić, 1994, p.159. このうち、セルビア人はクロアチアだけでも60万人を超えていた。*

⁶ Jelić-Butić, *op. cit.*, pp.165-166.

⁷ *Ibid.*, p.166. 占領の初期には敗残将兵の抵抗を防止するため、イタリア軍とドイツ軍もウスタシャの行動を容認した。彼らは、いくつかの地域では自ら反抗者の摘発をおこない、チェトニクの一団だとして捕捉したセルビア人を収容所に送った。ウスタシャ政権は逮捕者の大半を殺害したが、もともとクロアチア人と良好な関係にあった者やウスタシャに恭順の意を示し、財産を差し出した一部の者についてはセルビアへの移送を許した（Đuro Stanisavljević, *Pojava i razvitak četničkog pokreta u Hrvastkoj 1941-1942. godine, Istorija XX veka IV, Beograd, 1962, pp.16-17*).

⁸ その最初の事例は5月初めにクロアチア中部に位置するコルドゥン地方のブラガイで発生した。そこではヴェリユンという町で起こったクロアチア人の一家に対する殺人事件に関し、ウスタシャの一団が押し寄せ、容疑者としてこの町のセルビア人男子を一斉に召喚・逮捕した。その後、セルビア人住民は近隣の町ブラガイに連行され、250人の住民が殺害された。同様の事件は5月11日にクロアチア中部の都市グリーンでも起こり、約300人のセルビア人が虐殺された。以上、Jelić-Butić, *op. cit.*, p.166. なお以下の事例でもすべてあてはまることであるが、ウスタシャやチェトニクの蛮行による犠牲者の数には異説があり、正確な数は不詳である。

⁹ このうち、イタリアが取得したアドリア海沿岸部と島嶼部は経済的に発展した地域であり、沿岸部の中でクロアチアに残された部分は南部の後進的な地帯だけであった。この結果、イタリアに割譲されたアドリア海沿岸部と島嶼部には40万人のクロアチア人が取り残されることになった。

¹⁰ Matković, *op. cit.*, pp.63-64. さらに第三文書では、クロアチア王国（つまりクロアチア独立国）の政治的独立をイタリアは保証する代わりに、クロアチアはイタリアの庇護を裏切るような義務を他国には負わないと規定された。条約を結んだあと、パヴェリッチはイタリア国王に謁見し、クロアチア国王の王冠を彼に差し出した。この結果、形式的なこととはいえ、クロアチア王国の国王にはイタリアの王家の一員から選ばれることになった（*ibid.*, p.64）。しかし、この国王は身の危険を感じて一度もクロアチアの地に足を踏み入れなかった。

¹¹ *Ibid.*, p.101, pp.105-107. 1941年5月初めに結ばれた協定では、クロアチア独立国はドイツに対し約55000人の労働者を派遣することが取り決められ、その第一陣として、6月末に20000人の労働者が徴用されドイツに派遣された（*ibid.*, p.106）。

¹² *Ibid.*, p.102

¹³ Stanisavljević, *op. cit.*, p.24.

¹⁴ *Ibid.*, p.24.

¹⁵ たとえば、よく知られた事例では、6月2日に東ヘルツェゴヴィナの町リュビーネ近郊の農村でウスタシャは住民の大量虐殺を開始し、約140人のセルビア人農民を殺害した。その3日後の6月5日、北東へ

ルツェゴヴィナのガチカにあるコリットという村でウスタシャは約180人のセルビア人農民を殺害した。6月23日には再びリュビーネでウスタシャは約160人のセルビア人を逮捕し、殺害した。さらにウスタシャは6月26日にガチカ近郊の村で婦女子を含む約80人のセルビア人を殺害、6月28日にはストーラツのいくつかの村で約260人のセルビア人を殺害、メトコヴィッチ近郊のオブジェネでは280人のセルビア人を殺害、6月30日にはリュビンシュキー近郊で90人のセルビア人を殺害した。以上はヘルツェゴヴィナ地方での事例であるが、6月半ばにはセルビア人に対する大量殺人はアドリア海後背地のダルマチア北部にも広がった。すなわち、クニンおよびドウルニシュの村々でセルビア人農民が集団的に逮捕され、次々と殺害された。セルビア人に対する大量殺人はクニンに隣接するリカ地方にも及び、7月1日にはリカ地方南部のスーヴァヤの農村では婦女子を含む約300人のセルビア人が殺害された。以上、Jelić-Butić, *op. cit.*, pp.166-167.

¹⁶ ドイツとの合意は1941年6月4日に成立した。これに関連して、6月7日、ウスタシャ政権は政令を出し、1900年1月1日以降に來住したセルビア人およびその子孫に地方機関に出頭を命じた。10日以内に出頭に応じなかった者は戦争捕虜と見なすとした (*ibid.*, p.167)。

¹⁷ 当初の合意では、179000人のスロヴェニア人をクロアチアに受け入れ、同じ数だけのセルビア人をセルビアに移送する予定であった。しかし、1万人程度のスロヴェニア人をクロアチアが受け入れた段階でドイツは移送の中止を通告した。クロアチアからセルビアへのセルビア人の移送に関してはすでに収容所に入れられていた約3200人が受け入れられただけであった (*ibid.*, p.169, p.171)。

¹⁸ たとえば、規模の大きな事例を拾ってみると、7月24日と25日にクロアチア中部のペトリーニャにある農村グラドヴァツでは1200人を超えるセルビア人が殺害された。7月20日から27日にはプリエボイとその周辺部で数百人のセルビア人が殺害され、7月29日にはグリンの教会でも数百人が殺害された。7月下旬にグリンで殺害されたセルビア人は2000人に上るといわれ、グラチャツとその周辺部でも約500人のセルビア人が殺害されたとされる。ボスニ

ア・ヘルツェゴヴィナでも大規模なテロが発生し、クロアチアに近い西部ボスニアのビハチ、ボサスカ・クループパ、ツァジンの各地域では合わせておよそ2万人、サンスキー・モストでは6000人、プリエドールとボサンスキー・ノヴィでも6000人のセルビア人が殺害されたと見積もられている。ドゥヴナの農村部でも大規模な虐殺が起こり、ウスタシャは約250人のセルビア人を殺害した。7月29日にリーヴァニイで始まった虐殺は数ヶ月間で1000人を超える犠牲者を出したとされる。以上、*ibid.*, p.167.

¹⁹ 戦前、ノヴァコヴィッチは親枢軸国路線をとっていたストヤディノヴィッチ内閣で閣僚を務めた経験もあり、イタリアの政治指導者にもよく知られた人物であった。

²⁰ Stanisavljević, *op. cit.*, pp.18-19, Fikreta Jelić-Butić, *Četnici u Hrvatskoj : 1941-1945*, Globus, Zagreb, 1986, p.32.

²¹ イタリアはそもそもドイツが決めたユーゴスラヴィアの占領政策に大きな不満を抱いていた。第一にイタリアはバルカン半島の中央部にまで影響力を確保したいと考えていたが、ドイツはこれを許さなかった。ドイツとイタリアはユーゴスラヴィア国土について東から西に分割線を引いてそれぞれの影響力圏を分けたが、イタリアの影響力圏とされたのはユーゴスラヴィアの三分の一程度の地域であり、内陸部の主要都市と経済的に重要な地域はそのほとんどをドイツが確保した。第二にユーゴスラヴィアの中央部に広大な領土をもつクロアチア独立国の形成もイタリアにとって不満の残る裁定であった。それによってイタリアの野心に大きな制約が課せられたからである。しかも、ドイツがクロアチアの政権を担当させたウスタシャはその直前までイタリアが統制下に置いていた勢力であった。しかし、いまや国家の指導層となったウスタシャの幹部をイタリアは形式的には対等のパートナーとして取り扱わなければならなくなった。さらにドイツの存在もあり、イタリアはウスタシャをかつてのように意のままに操ることができなくなった。このこともイタリアにとって不愉快なことであった。

²² Stanisavljević, *op. cit.*, pp.30-31.

²³ この集団に当初、設定された任務はイタリア領に近いクニンスカ・クライナおよびリカ地方で同志を募

り、イタリア軍の指示に従って、この地方に展開するウスタシャを混乱に陥らせるような破壊活動をするにであった。ローマ条約により、クロアチア独立国の領土から撤退することになっていたイタリア軍は治安の維持を口実にこの地方の拠点都市であるクニンとグラチャツに駐留を続ける予定でいた (Stanisavljević, op. cit., p.32)。

²⁴ Jelić-Butić, op. cit., p.33.

²⁵ Stanisavljević, op. cit., p.32. このうち、ジュイッチは元々ボスニアとの境界沿いの町ストルミツァの正教会の司祭であった。しかし、戦前からチェトニクの運動に身を投じて北ダルマチアのクニンスカ・クライナのリーダーとなっていた。ラジェノヴィッチはリカ地方出身のユーゴスラヴィア急進連盟所属の元国会議員であり、戦前にはクロアチア自治州の形成に反対し「セルビア人の結集」の運動をクロアチアで進めていた人物であった。後述するように、二人とも反乱が開始されると、それぞれの郷里に戻り、チェトニクの影響力を強める運動をおこなった。

²⁶ このとき、ユーゴスラヴィア共産党とコミンテルンとの交信はザグレブにある無線機を通しておこなわれていた。それゆえ、クロアチア共産党指導部はベオグラードのチトーとユーゴスラヴィア共産党中央委員会よりも早くコミンテルンからの情報と指示に接していた。独ソ戦開始後のクロアチアの共産主義者の素早い行動もこのことを背景としていたと考えられる。

²⁷ その最大の失敗例が7月13日から14日に起こった「クレスティネツの悲劇」と呼ばれる事件である。クロアチアの首府ザグレブからも近いクレスティネツには城館を転用した収容所があり、多数の共産主義者が投獄されていた。彼らを救出するためにクロアチア共産党は夜襲を敢行したが、十分な準備を怠ったため、敵方の反撃によって党は約80名の党員と党友を失った。クロアチア共産党の戦術転換のきっかけとなったこの事件については、Ivan Jelić, *Tragedija u Kerestincu : zagrebačko ljeto 1941*, Globus, Zagreb, 1986を参照。

²⁸ Ivan Jelić, *Komunistička partija Hrvatske 1937-1941 sv.2*, Institut za historiju radničkog pokreta Hrvatske, Zagreb 1972, pp.67-102. Ivo i Slavko Goldstein, *Srbi i Hrvati u narodnooslobodilačkoj borbi u Hrvatskoj*, Dijalog

povjesničara-istoričara 7, Zaklada Friedrich Naumann, Zagreb 2003, p.251.

²⁹ 1941年6月にユーゴスラヴィア共産党の全党員数は約12000人、党友（共産主義青年同盟員）の数が50000人から60000人程度と推定されたが、クロアチア共産党は約4500人の党員と12000人程度の党友を抱えていた。これに対し、セルビアの党組織の党員数は2500人程度だったという (Branko Petranović, *Istorija Jugoslavije : 1918-1978*, Nolit, Beograd, 1981, p.230. Dušan Bilandžić, *Historija Socijalističke Federativne Republike Jugoslavije : glavni procesi : 1918-1985*, Školska knjiga, Zagreb, 1985, p.52, Dušan Bilandžić, *Hrvatska moderna povijest*, Golden marketing, Zagreb 1999, p.129)。

なおクロアチア共産党の一つの強みは、スペイン内戦に義勇兵として参加し、生還した党員を比較的多く抱えていたことである。彼らは100名程度であったが、人民解放戦争においてはその経験を生かし有能な軍事および政治的リーダーとして各地の戦線で活躍した。

³⁰ クロアチア共産党の最高幹部（中央委員会委員）の一人であるマルコ・オレシュコヴィッチは中部リカのコレニツァに到来し、党組織の再建と蜂起の準備を指導していた。しかし、彼が南リカのスルブにまで足を伸ばすのは蜂起が成功し、ドーニイ・ラパツ郡が解放された後のことだった。

³¹ *Kotar Donji Lapac u narodnooslobodilačkom ratu : 1941-1945*, Zbornik radova (redakcija Petar Babić Pepa, et al.), Karlovac : Historijski arhiv, 1985, p.103. このうち最大の犠牲者を出した事件が7月1日にスルブ近郊のスーヴァヤの農村で起こった集団虐殺であり、ウスタシャの部隊はドモブランの部隊の支援の下に村々を焼き払い、253名の住民を殺害した。

³² それでも不安に駆られた住民の中には故郷を捨て、セルビアないしイタリア領のダルマチアに避難する者もいた。5月から6月の間に約100人がドーニイ・ラパツを去った。多くの者はセルビアに向かい、一部は北ダルマチアのキスターニエに向かった (ibid., p.105)。

³³ ドーニイ・ラパツ郡の共産党支部には二人の党員が残っていただけであった。彼らは適切な行動をとらなかった責任を問われ、ドーニイ・ラパツ解放

後に開かれた党の会議で追放処分を受けた。

³⁴ ドーニイ・ラパツ郡は農業以外に産業のない後進地域であったため、仕事を求めて域外に移住する者が多かった。しかし、ユーゴスラヴィア王国の崩壊と枢軸国による占領によって、多くの人びとが避難民として郷里に戻ってきた。中でももっともまとまっていた集団はドイツによってヴォイヴォディナの開拓地を追われた人びとであり、このうち最大のグループは移住地の地名にちなんで「ジェドニチカグループ」と呼ばれた集団であった。このグループの中には共産党員のヨヴァニッチ、彼を補佐したダニーロ・ダムヤノヴィッチ・ダニッチとブランコ・デスニツァの他、20数名の共産主義青年同盟の会員がいた。彼らは革命委員会のコア・グループとなった (ibid., pp.99-100)。

³⁵ Ibid., pp.108-111.

³⁶ Ibid., pp.113-114.

³⁷ ポロヴィナはこのときドーニイ・ラパツ郡にある郷里の村ドープロ・セロに潜伏していた。その中で彼は革命委員会のメンバーと出会い、彼らがボスニアのドゥルヴァールと連絡をとり、蜂起の準備をしていることを知った。ヨヴァニッチらが党の上層部の指示もなく、またグラチャツの組織にも報告せずに行動を進めていることをポロヴィナは遺憾とした。しかし、彼らが献身的な努力をし、準備が組織的に進んでいることについては、ポロヴィナは感嘆した。彼は革命委員会のメンバーをグラチャツに派遣し、地区委員会のメンバーを呼び寄せるように指示した (ibid., p.115)。

³⁸ 7月20日に開催されたボサンスコ・グラホヴォの党支部での会議では、もっとも好都合な時期だと判断される日に蜂起を開始すると申し合わされていたが、具体的な日程は話題にならなかった。スルブ側代表として会議に参加したジョコ・ヨヴァニッチの回想によると、それはソ連軍の反撃が始まると共にスルブの側の準備が完了した時期であり、具体的にはそれはあと一ヶ月先のことだろうと彼自身は想定していた (ibid., pp.113-114)。

³⁹ スルブ側の最初の作戦はスルブの西にあるドーニイ・スーヴァヤの橋と電話線を破壊することだった。このあとスルブの北のネテカで最初の戦闘が起きた。スルブの町長と数名のウスタシャおよび憲兵

隊員を乗せスルブからドーニイ・ラパツに向かっていた郵便配達用のバスをネテカのゲリラ部隊20数名が襲撃した。ゲリラ部隊のうち、銃で武装していたのは二人だけであり、残りは鋤や斧をもっていただけだった。しかし、攻撃を受けたウスタシャおよび憲兵隊員はスーヴァヤ方面に退却し、ゲリラ部隊はバスを奪った (ibid., p.118)。

⁴⁰ 一方、ドゥルヴァールのゲリラ部隊司令部は、クニンに駐屯していたドモブラン (クロアチア独立国の国防軍) がドゥルヴァールに応援部隊を派遣するのを阻止するようにスルブ側に要請していた。これを受けて、スルブのゲリラ部隊は鉄道の線路に地雷を仕掛け、ドモブランの兵士を輸送していた汽車を転覆させた。このあと戦闘が起きたが、ドモブランの兵士はクニン方面へ退却した (ibid., p.119)。

⁴¹ ドーニイ・ラパツに駐留していたウスタシャの機動部隊は蜂起の起こる10日前に別の地域に移動していた (ibid., p.156)。7月末のドーニイ・ラパツとその周辺部に配置されていた政府側の武装勢力の内訳は、三地域にいたウスタシャの部隊60名、五地域に駐在する憲兵25名、隣町のターレン・ヴァクフに駐屯するドモブラン (クロアチア国防軍) 兵士40名、その他15名であった (ibid., p.106)。

⁴² ウスタシャ政権は武器の提出を住民に命じ、これに従わない者は死刑にすると脅した。そのため、住民の一部はこの命令に応じて武器を差し出した。しかし、それでもドーニイ・ラパツの住民は7丁の自動小銃、580丁の小銃、30丁程度の拳銃を隠し持っていた (ibid., pp.100-101)。

⁴³ これらの地域、とくにゴールスキー・コートルについてはクロアチア農民党の支持基盤が弱かったことがクロアチア人農民の蜂起への引き込みを可能にしたもう一つの要因であった。

⁴⁴ とくにセルビア人は同じく正教を信仰するロシア人に強い連帯感をもっていた。

⁴⁵ 枢軸国は当初、クロアチア独立国に大きな戦力の保有を認めず、ドモブランの兵員は16000人に限定されていた。

⁴⁶ たとえば、反乱が開始された翌日の7月28日と29日、スーヴァヤとブロートニヤのセルビア人住民が結成したゲリラ部隊はブロートニヤに住む4軒のクロアチア人家族を皆殺しにしようとした。7月初めにウ

スタシヤはスーヴァヤとブロートニヤでセルビア人の集団虐殺をおこなっていたので、ゲリラ部隊のメンバー、とくに家族を殺された者は報復をしたいという感情を抑えることができなかったという。このことをこのことを聞きつけたスルブのゲリラ部隊本部はメンバーを派遣し、このような決着の付け方を阻止しようとした。しかし、三名の命を救っただけに終わった (ibid., p.122)。ブロートニヤでは37人のクロアチア人が殺害された。彼らの家屋は略奪され、破壊されたことが明らかになっている (VJESNIK, 9. 10. 1999, p.13)。

またドーニイ・ラパツ郡の北部にはポリチェヴァツツというクロアチア人が集住する町があった。7月31日、この町に住むウスタシヤのメンバーと住民約2000名は町を捨て、近くにある西ボスニアの都市クーレン・ヴァクフに避難した。そこにはドモブランの駐屯地があったためである。8月2日、北進したスルブ各地のゲリラ部隊はポリチェヴァツツに入った。そこには彼らの村から略奪された物財があったため、ゲリラ部隊のメンバーは直ちにこれを取り戻し始めた。部隊に付き添っていた共産党員のゴイコ・ポロヴィナはこれが略奪にならないように集めた物財の一部を燃やすように命じたという。その後ゲリラ部隊の一部が街に火を放ち、ポリチェヴァツツの町は焼き払われてしまった (Kotar Donji Lapac u narodnooslobodilačkom ratu, p.123)。

なおこの文献には記されていないが、ポリチェヴァツツではセルビア人の武装集団は町に残っていた55人の住民（このうち、44人は女性と子ども、11人は高齢者）を皆殺にしたことが明らかになっている。ポリチェヴァツツには第二次世界大戦後にも当局によってクロアチア人住民の復帰が許されなかった (VJESNIK, 9. 10. 1999, p.13)。

⁴⁷ ドーニイ・ラパツツの蜂起集団を指導した共産主義者の一人であるジョコ・ヨヴァニッチは後にこうした行為の存在を認め、こう弁明している。「ウスタシヤによる蛮行は多くの人びとに大きな心の傷跡を残し、低い意識の人びとの下では復讐心と罪のない人びとに対しても責任を求めようとする気持ちが育まれた」 (Kotar Donji Lapac u narodnooslobodilačkom ratu, p.155)。

⁴⁸ ドーニイ・ラパツツ郡には約400人の帰郷者があつ

たが、このうち彼らは約150人を数えた。彼らに続いて多かったのが120人を数えた出稼ぎに出ていた労働者であった (ibid., p.99)。

⁴⁹ ドーニイ・ラパツツにおけるその代表的な事例は旧ユーゴスラヴィア王国軍で砲兵隊長を務めていたボシユコ・ラシエタ少尉の登用である。クロアチア共産党グラチャツツ地区委員会書記のゴイコ・ポロヴィナの推薦により、ラシエタはドーニイ・ラパツツのゲリラ部隊司令部に入り、作戦参謀の役割を務めた。しかし、彼はほどなくして蜂起集団を離れ、イタリアおよびチェトニクの陣営に入った。

⁵⁰ たとえば、7月23日にベンコヴァツツで開催されたイタリア政府代表との会議に参加したパイツツァ・オムチクスはミロシュ・トルピツァ父子と共にイタリア領からスルブに戻り、蜂起の開始直前に蜂起集団に加わって統率者の地位に就いた。しかし、ジョコ・ヨヴァニッチによると、蜂起の開始日にオムチクスは戦いに参加するように指示を与えたが、「仲間と相談する必要がある」という理由でこれに加わらなかった (ibid., pp.117-118)。

⁵¹ クロアチアとボスニアで住民蜂起が起こる4日前の7月23日、イタリア領ダルマチアの都市ベンコヴァツツで恐らくはザダルの県庁側の提案と後見の下にセルビア人の有力政治家が一堂に会する会合が開催された。この場合の有力政治家とは、モムチロ・ジュイッチ、ステイーヴ・ラジェノヴィッチ、パイツツァ・オムチクス、ヴラド・ノヴァコヴィッチ、イリヤ・ゼチェヴィッチといった人物であり、実際には後にクロアチアにおけるチェトニクの指導者となった人びとを指していた。イタリア側の報告文書によると、この席でイタリア側は、セルビア人政治家に対してそれぞれの出身地域に戻り、クニンとグラチャツツの両郡がイタリア王国に併合されるように運動をおこなうことを提案したところ、彼らはこれに完全に同意した。共産主義者の一団による恐ろしい危険が我々に迫っており、セルビア人政治家は、彼らとイタリアの利益は一致していると強調した。イタリア側はセルビア人政治家に財政的および物的な支援を約束した (Stanisavljević, op. cit., p.36, Jelić-Butić, op. cit., p.36)。

⁵² たとえば、モムチロ・ジュイッチはストルミツツァに、ジフコ・ブルコヴィッチはゴルビツツに、ヴラド・

ノヴァコヴィッチはパジャネに、パヨ・ポボヴィッチはコソヴォ・ポーリエ（北ダルマチアの一地域）に赴いた。かくして、チェトニクの指導者はクニンスカ・クライナのほぼすべての地域とブコヴィツァを覆い尽くした（Stanisavljević, op. cit., p.49）。

⁵³ クニンスカ・クライナの蜂起集団におけるチェトニクの勢力は一つには共産主義者の側の弱点につけ込んで比較的容易に成長した。たとえば、このときドゥルヴァールのゲリラ部隊司令部はボスニアの蜂起集団の指導に忙殺されていた。それに北ダルマチアに位置するクニンスカ・クライナはクロアチア共産党ダルマチア地方委員会の指導に服すべき地域であり、ボスニアの党組織は本来的には他の地域の党組織の管轄下にある地域に干渉できなかった。ドゥルヴァールの党組織はダルマチアの党組織に注意を喚起したが、北ダルマチアはイタリアの支配によって分断されているという事情もあり、ダルマチアの党組織はクニンスカ・クライナの状況を十分に把握していなかった（ibid., p.48）。

⁵⁴ その第一歩として、注目されるのは、8月9日付の命令書においてブルコヴィッチは勝手に、だがよく考えた上でゲリラ部隊の名称を変更したことである。すなわち、ドゥルヴァールのゲリラ部隊司令部の正式名称である「ボサンスコ・グラホヴァとその周辺地域のゲリラ部隊司令部」という名称を「ゲリラ・チェトニク部隊最高司令部」という名称に、また自分の司令部を「クニンスカ・クライナのゲリラ・チェトニク部隊司令部」に変更して、指令を出した。「ゲリラ」という名称はドゥルヴァールの司令部が使用し、クニンスカ・クライナでも蜂起者を表す言葉になっている。これはブルコヴィッチも落とせなかった。しかし、それゆえにブルコヴィッチはゲリラという言葉にチェトニクの名称を追加した。これによって、蜂起を起こしたのは単にゲリラ集団ではなく、チェトニクだというメッセージを込めた。これは、チェトニクのプレゼンスを周囲に明らかにする所作であったと見ることができる（ibid., p.50）。

⁵⁵ ラジェノヴィッチのグループは住民への宣伝活動を通して間接的に、また南方のスルブでゲリラ部隊の統率者に加わっていたキスターニエの難民キャンプの仲間（パイツァ・オムチクス）の助けを借りて直接的に、ドーニイ・ラパッツのゲリラ部隊司令部

に対し圧力をかけた。第一に、経験があり有能な者による真の権力を打ち立てようとする主張し、共産主義者が解放区の末端の統治機構として各村に設置した村民委員会の廃止を企てた。彼らは第二に、民衆が選んでいないという理由により、ドーニイ・ラパッツのゲリラ部隊司令部（つまり共産主義者とそのシンパ）を交代させようと画策した。しかし、さすがにこれは抵抗にあって失敗した。ドーニイ・ラパッツの司令部はリカ地方全体のゲリラ部隊を指揮する司令部であり、このレベルでは共産主義者の統制力は強かった（ibid., pp.51-52）。

⁵⁶ リカ地方中部のゴスピッチ郡では反乱勢力が成長する前にウスタシャ政権側の反撃が始まり、セルビア人住民が報復テロにさらされていた。このようなときに到来したイタリア軍を住民は内心歓迎し、蜂起勢力も傍観せざるを得なかった。「イタリア人はセルビア人の友人だ」ということを実証するため、イタリア軍はウスタシャの勢力によるテロを止めさせ、数百人の住民、とくに婦女子を車両に乗せてイタリア領ダルマチアに避難させた。チェトニクはこのことを宣伝活動に大いに利用した（ibid., p.58）。

⁵⁷ この方針は1941年8月8日に開催されたイタリア第二軍団の司令官の会議で下された。第二軍団総司令官のアムプロジオ将軍は「これはまさに共産主義的な運動であり、共産主義者が固く統制力を握る蜂起集団は単にクロアチア独立国に関する利益を脅かすだけでなく、もっと深刻な結果に発展する可能性がある」という部下の分析に同意し、クロアチア独立国の領土（第二ゾーンと第三ゾーン）の再占領を決めた。この方針はウスタシャの首領のパヴェリッチにも伝えた。もちろん、セルビア人グループの奉仕を利用することは伏せておいてのことであるが、セルビア人政治家とチェトニクにはリカ、西ボスニア、ゴールスキー・コートル、コルドゥンの制圧を平和的におこなうことができるように蜂起集団の中で活動をする任務を与えていた（ibid., pp.65-66）。

⁵⁸ Ibid., pp.75-76. なおブルコヴィッチとジュイッチが主張した戦術とは、より強力な勢力でイタリアを攻撃するためストルミツァに誘き寄せ、クニン方面に圧力をかけつつゴルビッチの勢力を好機に動かすことによってイタリア軍を壊滅させるというものであった。

⁵⁹ 本稿の導入部で紹介したように、クロアチア歴史研究所のディズダルは蜂起部隊の実体は「チェトニクの紋章の入ったベレー帽をかぶったチェトニクの成員と赤い五角星の紋章の入った帽子をかぶったゲリラおよび共産主義者」の混成集団だと述べているが、本当に最初からそのように明確な姿でチェトニクとパルチザンの兵士が存在していたのかは大いに疑問である。少なくともリカ地方ではパルチザンは9月半ばになって初めて模範部隊が結成されたので、反乱が起こった最初の期間には存在しなかったことは明らかである。

⁶⁰ Ibid., pp.76-77.

⁶¹ Ibid., p.78.

⁶² Kotar Donji Lapac u narodnooslobodilačkom ratu, pp.142-143.

⁶³ Ibid., p.143-144.

⁶⁴ Stanislavljević, op. cit., pp.80-81. なおチェトニクの組織の特徴として指摘しておきたいことは、共産党的ように全国的なセンターがあり、そこからの指示に基づいて組織化が進められた勢力ではないことである。チェトニクは末端レベルでは各集落の自衛団の

ような部隊を単位とし、各地域に割拠する指導者がこれを統率していた地域的な自律性が大きな勢力である。したがって、統一的な指令系統に服した組織というよりも、自律性の大きな軍閥のゆるやかな連合体に近い組織であった。ただし、ロンドンの亡命政府がミハイロヴィッチを将軍に昇進させると共に国防大臣に任命したため、各地のチェトニクの指導者は彼の権威を受け入れ、表向きその配下の部隊となった。国王を頂点とするユーゴスラヴィア王国政府軍の一員としての地位を獲得し、権威の上で共産主義者に対抗するためである。

⁶⁵ セルビアやモンテネグロなど、ユーゴスラヴィアの東部地域で展開したチェトニクに関する研究の第一人者であるヨーゾ・トマセヴィッチが指摘しているように、チェトニクの陣営がおこなった反パルチザン戦術の中でもっとも効果的だった手法は、スパイを送り込んだり、メンバーを籠絡したりして、パルチザン部隊の中でクーデターを起こし、部隊を崩壊させることであった (Jozo Tomasevich, *Četnici u drugom svjetskom ratu 1941-1945*, Sveučilišna naklada Liber, Zagreb, 1979, pp.151-152)。